

産婦人科救急医療に関して



西条市医師会会員
サカタ産婦人科
坂田圭司

高齢になるほど頻度が増すといわれています。

原因はよく分かっています。娘が、胎児の染色体異常によるものが多いといわれています。最近超音波診断技術の進歩で胎児の心拍の有無を確認することにより、出血、腹痛などの症状が現れる前から診断できるようになっております。

診断のついた妊婦さんは、とてもすぐにはその事実を受け入れがたいものですが、早期にその妊娠を終了させることにする上でも重要と思っております。

●性感染症について

最近、若い人たちの間でクラミジア、淋菌をはじめとする性感染症が非常に増加してきました。患者さんによっては子宮内膜から卵管、そして腹腔内に炎症が波及し、激しい腹痛を訴えて受診される場合があります。

治療に抵抗性であったり、

繰り返しかかかってしまう患者さんもいて、適切に治療しなければ不妊症になったり、妊娠したとしても子宮外妊娠となったり合併症に苦しむ場合があります。

感染源、感染経路を特定し、治療後も再発を防ぐことが重要で、パートナーも一緒に治療するのが基本です。

●早産について

比較的平穏な妊娠中期を過ぎたころの妊婦さんの管理で最も困るのが早産です。胎児は、妊娠36週以前では一般に子宮の中の生存が望ましいのですが、何らかの原因で子宮が収縮し、子宮の口が開いて、まだ37週に満たないのにお産になってしまう場合があります。

愛媛県では平成17年10月より、新生児ドクターカー（救急車）が愛媛県立中央病院に配備されました。その名は、「あいあい号」。私の診療所でも早産児が生まれてしまったり、新生児の調子が悪く、新生児の調子が悪くないときに何度か来ていただき、大変助かっています。

●安心したお産に向けて

安心してお産ができることはとても重要です。そのお産が帝王切開になったり、あるいは高次医療機関に搬送になったとしても、最終的に事故



がなく母児ともに健康に退院できる結果を得られることが最も理想的と考えています。すべての患者さん、すべての妊婦さん、すべての胎児・新生児は最高水準の医療を受ける権利を持っています。もし自分の施設が治療をする上で不利と判断した場合は、速やかに搬送または応援医の要請を行うべきです。妊産婦さんも出血や腹痛、あるいは胎動感の消失といった症状があった場合には、速やかに受診していただきたいと思っております。今後も初心を忘れず、決して慢心することなく診療に専念したいと思います。

●流産について
妊娠した女性が流産する確率は意外と高く、30歳までは10%、35歳で20%、40歳では40%、42歳では50%以上と、

産婦人科医になって24年が経過しました。これまで、緊急を要する患者さんと接する機会が幾度もありました。今でも初めてみる疾患に出くわすことがあります。冷や汗が出ることもしょっちゅうで、経験したことのある症例においても患者さんによってバリエーションがあり、その都度緊張させられます。

今回は産婦人科における救急疾患のなかで、私がよく遭遇するものをお話します。述べてみたいと思います。

治療に抵抗性であったり、